

# 文化高知

2004年11月 NO.122



「春、ここに僕はいる」  
小野寺るか

〈もくじ〉

一筋の道	北村文和	2
人生の中での大切な出会い	山口裕子	3
わが心のふるさと・土佐	平井秀明	4～6
絵金歌舞伎、10年を振り返って	横矢佐代	8～9
高知こどもの図書館の5年	浜垣昌子	10～11
幕末の人物たちの身長	豊田満広	12
かるぼーと8月～9月の事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

# 一筋の道

## 北村文和

「紺屋の白袴」「紺屋のあさって」「あさってを言われぬ紺屋あわれなり」。何かと引き合いに出される紺屋すなわち染物屋、そこに私は生まれた。

藩政時代から紺屋町新市町で染物を生業として代々受け継いで百三十余年、四代目という立場で家業存続のため子どもころから広く浅くいろいろな修業を受けさせられた。染色の工程が分業制の京都等と違って、地方の染屋は一貫して作業するため、どのような要望にも対処できる素養が必要ということで、幼いころからピアノ、日本画、書道、茶道、華道、長唄、三味線、謡曲、鳴物等々、よくもまあ続いたものとおられるほどだが、別に苦にもならず稽古に通ったことが今何らかの役に立って作品に影響していると思っている。

るほど水系の良かったこの通りには六、七軒の染屋があったそうだが、よくよく儲けにならぬ仕事らしく今では当方一軒になった。前述のおり色々な注文に即座に対応するのに一番必要なものは絵と字の素養で、中学校入学の六月六日に日本画の大家である嶋内松南先生に入門した。絵はもともと嫌いではなかったもので、三日にあけず通って教えを受けた。先生が亡くなるまで絵はもとよりあらゆる教訓を受けたことは何ものにも代え難い宝物と感謝している。

昭和二十二年県展開幕の朗報。平和が甦った。県展発足時は洋画・日本画・彫塑の三部門のみで、第六回展で特選をいただいたときは二十歳と若かった。特選の翌年は推薦の制度が定まり、特選三回を重ね到達する無鑑査まで最短五年を要する。それではとファイトを燃やして挑戦し



「蘭花」華麗な中にも優し難い気品漂うこの花には特に惹かれる。どのような作品を作しても常に品位ある格調を持ち続けたいと思う。

物の伝承をさらに伸ばすかたわら、民芸品としての土佐の染めを美術館の中でも通用する作品に発展させた。この思いが心の支えとなった。好きな配色「赤と黒」を基調に毎年恒例の高知大丸個展も三十回を数え、県展ともども一生続けることを目標に、作品だけは年を取らず若さを保ちつつ生涯現役に徹したいと念願している。

（きたむらふみかず／高知県展理）  
（事長）

# 人生の中での大切な出会い

## 山口裕子



私の故郷は高知です。私の原点も高知です。

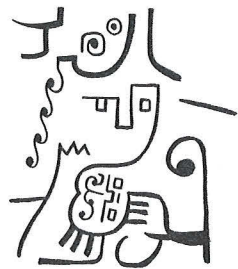
私は小さいころからお絵かきが好きな少女ではありませんでした。親の言うままにピアノを習いお勉強に励むおとなしい女の子でした。

忘れもしない中学校二年生の美術の授業が終わった後、教師と呼ばれて聞かれました。将来おまえは何になるつもりなのかと。私は即答、ピアノです。両親が音大に行けというものですから。クラブ活動もブラスバンド部を選んでやっています。そうすると美術の教師は、おまえは好きでやっているのかと言いました。私は即答、好きではありません。せんと応えました。なぜ好きじゃないのにピアノリストなんだと言われ、また即答、親に言われたからです、と応えました。それから美術の教師は、おまえにはデザイン

るんだ。これからの時代はデザイン

の時代はデザインって何？という時代でした。その美術教師は、デザインとは本の装丁であったりお菓子のパッケージであったりファッションであったりするけれど、将来デザインが時代をつくるようにきつくなるはずだ！おまえの色彩感覚とそのすばやいレタリング能力とグラフィック感性があれば大丈夫だと中学校二年生の私に暗示をかけた。美術が得意でも好きでもない私にそんなことを言っ、この道に後押しした美術の教師との出会いでした。高校からは我武者羅にデザイン

と、高校生では抜きんできた成績で美大へと進学しました。ところが大学生活は順風満帆ではなくバスケットボールとバイトの明け暮れで、将来の職業は、漫然と広告代理店に行きたい、アートディレクターになりたい、と思っていました。しかし、その当時は男女雇用機会均等法もなく男女差別の激しい時代。女は広告代理店には、お茶くみ、受け付け、コピー取りしかいらぬ時代でした。そこで私を救ってくれたのがサンリオ



オです。会社説明会でサンリオの社長が、サンリオは営業であろうが事務であろうが全員がクリエイターだと豪語しているのを逆手にとり、この会社ならデザイナーは絵だけ描いていけばいいと言われな

いだろうと思、入社しました。サンリオに入ってから、アメリカの某会社から引き抜かれてやってきた課長に、おまえは自分で描くことの喜びからディレクションする喜

びに変えていけ！日本はこれからアメリカと同じように女が仕事を一生のものにしていくはずだ。キティを自分の力だけでやっていくのには限界がある。ディレクションの力をつけて内部にも外部にも優秀なスタッフを抱えることに努力をしようと

われしました。この上司との出会いが今日の私をつくりました。岐路に立っている時に出会いがあるから、人は変化していくものだと思います。キャラクターも同じです。キャラクターも変化進化し続けなければ終止符を迎えます。飽きられるのです。私はこれからもキティとともに進化し続けるでしょう。でも決して忘れてはいけないことは故郷高知で原点の出会いがあったこと。いつも誰かに出会い進化するための助言をいただいていることです。

今の私にとって感動することは、キティのファンの世界の人々からいただく、いつまでも頑張って私たちに夢を与えてくださいというメッセージです。つらい時、悲しい時、人々はキティから癒され勇気もらいます。私は世界のキティファンから希望ももらうのです。やまぐちゆうこ／株式会社サンリオ・ハローキティデザイナー

# わが心のふるさと・土佐

平井秀明



## 常に土佐の空気が漂っていた我が家

このたび「市民が歌う第九シンフォニー」で高知の皆様と一緒できることを心からうれしく思い、土佐ならではの陽気で豪快な「第九」を目指し、約三百名の出演者と聴衆が一丸となり、ベートーヴェンが理想に掲げた兄弟愛を思う存分発揮できればと願っている。作曲家の祖父、平井康三郎も、機会があればぜひ土佐で演奏してほしい、と私に言っていただけに、ついにその念願がかなうことになり誠に光栄である。

振り返ってみると、幼少より我が家には、常に土佐の空気が漂っていたように思う。音楽のこととなると特に厳しく、全く妥協を許すことのない祖父は、まさしく「いごっそう」であった。しかし、土佐のうるめや鯉のたたきなどで、毎日の晩酌を欠かすことのなかった祖父は、夜になると非常に陽気で、土佐弁やジョークが次々と飛び出すほどの、ユーモアセンスとサービスピース精神の旺盛さで家族や来客を楽しませてくれた。ふと気が付くと食事中に楽想が閃いて、作曲に没頭している姿もしばしば見かけたものであるが、音楽

でも日常生活においても、多くの人々を自ら、あるいは自作品を通して楽しませることを心から好んだのではないだろうか。

土佐中での柔道部主将を務めていた青春時代のことや、祖父の実家には時折、大相撲の地方巡業や劇団、エストニアのレスリングまでが招かれ、その豪快な興行を間近に見て育ったこと、イベントの際には大きなたて看板を描いたこと…折に触れて懐かしそうに土佐の話をしてくれたものである。若いころから晩年まで書き綴った「土佐方言集」というノートは何冊にも上り、離れていても故郷をこよなく愛していた姿は非常に感慨深いものがある。

幼少時代の私は、家の中でじっと音楽の練習をするよりは、外で大暴れする方がはるかに好きな腕白少年で、両親や祖父母をてこずらせ叱られることは日常茶飯事であった。しかし、私と弟がちゃんばらごっこをしているのを知った祖父は、朝起きるたびにいつの間にか得意の工作で刀、兜、手裏剣までこしらえてくれ

るなど、厳しい中にも優しく接してくれた祖父を心から慕っていた。祖父は工作、絵画、習字、デザイン画など、音楽以外の幅広い芸術分野においても非常に器用であったため、孫のおもちゃのみならず、身の回りの楽譜や本の表紙からお惣菜のタッパーのラベルに至るまで、オリジナルの発揮された品々も溢れており、芸術家としての想像力の豊かさが実生活からもひしひしと伝わってきたように思う。

私は腕白少年であった一方で、祖父の仕事の見よう見まねで、いつしか作曲を始めた覚えがある。やがてそれを見て放っておけなかった祖父が、仕事の合間に作曲の手ほどきをしてくれるようになったが、言ってみれば外国語を話し始めた子どもに、後から文法を教えるという、通常とは逆のプロセスであった。私は幼少よりピアノとヴァイオリンを始めたが、チェリストの父に憧れて、ヴァイオリンを逆さまにしてチェロの真似事をするようになり、小学校入学とともに念願のチェロを始めた。小中高の十二年間は音楽に囲まれて育つ一方、サッカー、合気道、生徒会（祖父も土佐中で私同様に生徒会長も務めたい）などにも熱中し、活発な少年時代を送った。

## 指揮者になるためオーケストラを結成

我が家の音楽教育理念は大人子どもを問わず厳しいものであったが、音楽の道の厳しさを知るがゆえに、三代目も音楽家になることに家族は猛反対だった。音楽は一生かけて奥深くまで掘り下げるべき芸術で、若いころから幅広く学び、国際人としての視野を広げるべきだというのが、我が家の方針であった。自分自身で相当の覚悟を決めて選ぶべき道であることは、歌舞伎界、角界などとも変わらない。父の恩師、巨匠カザルスのように、音楽を通じて国際平和に貢献できるような生き方をしたい、という夢を抱き、国際政治を勉強するために渡米した。機会があれば音楽家の道を歩みたい、という密かな願いも秘めて…

このころから紆余曲折を経て、指揮者への道を切り拓くことになる。自分を試す思いもあり、入学した大学に併設の音楽院で指揮の授業を取ったことが一大転機となった。厳格で有名だったエフロン先生に最初の授業で認めていただき、指揮者になるための本格的な厳しいレッスンは始まった。政治の勉強で寝る暇もな

く、音楽の勉強にさけるわずかの時間、まさに至福の時かつ、集中して吸収すべき真剣勝負のひとつときでもあった。

一年間基礎を徹底的に教えてくださった後、夏休みを前に先生はおっしゃった。「本気で指揮者になりたいのなら、自分でオーケストラを作るくらいのやる気と情熱がなくてはやっていけない」。私はこの道の厳しさを改めて実感した。しかし、音楽への情熱は人一倍強かった私は、その言葉を真に受けてワシントンD.C.の若手音楽家を朝から晩までリクルートして、ついにオーケストラを結成してしまっただけでなく、夏休み限りのつもりが、幸い演奏依頼が舞い込み、大学の新学期が始まるとオーケストラの練習継続のために、月に二回ほどニューヨーク州北部から首都ワシントンまで、週末に車で往復十五時間かけて通う、いわゆる「二足のわらじ」の学生生活が始まった。

今思えば良くできたなという思いであるが、音楽家になりたいという強い志が、まるで血が騒ぐように溢れ出てきて、坂本龍馬のように若き



卒寿を迎えた平井康三郎さん（筆者の祖父）を囲んで（2000年9月）。左から、チェリストの文一朗さん（筆者の父）、筆者、康三郎さん、ピアニストの美那子さん（筆者の母）、ピアニストの元喜さん（筆者の弟）

情熱一筋でまい進していたのである。私は、いつも大きな夢を追いかける楽道家でもあるが、これも土佐の気質を引き継いでいるのかもしれない、と最近感じるようになった。祖父に加え、母方の祖父も高知出身であるため、大半に土佐の血が流れているためであろうか。

# 市民が歌う第九シンフォニー

日本の年末の風物詩となっているベートーヴェンの「第九」演奏会は、その季節になると全国で100を超える演奏会が開催される人気プログラムとなっています。このベートーヴェンの「第九」については、プロの演奏団体による演奏会も多く開催されていますが、大規模な合唱団を要することから、一般公募により合唱団を結成する「市民参加型」の演奏会が多く開催されるのが特徴でもあります。高知市でも1996年、高知県民文化ホールにおいて、地元合唱団とオーケストラにより開催された経過がありますが、この数年、合唱団とオーケストラの共演による大規模な「第九」演奏会は開催されておらず、高知市文化プラザの開館により、県内音楽関係者から「第九」演奏会への期待や要望が増していました。

今回開催する「市民が歌う第九シンフォニー演奏会」は、前述の期待や要望に応えるとともに、高知市文化プラザ開館3周年及び(財)高知市文化振興事業団創立20周年記念事業として、地元合唱連盟と演奏団体の協力を得ながら、地元音楽家の連携と市民の参加により開催する年末の一大イベントです。本演奏会の特徴は、①合唱団は広く市民からの一般公募により結成する ②オーケストラは地元団体により結成する ③ソリストは可能な限り高知で活躍する声楽家とする ④著名な指揮者を招き、芸術性の高い音楽に触れる機会を提供する 等があげられ、地元音楽家と市民の協力により市民文化を体験・創造・発信する「高知市文化プラザ地元育成企画」の基軸として位置づけ、高知市の新しい文化の拠点「高知市文化プラザ」で開催するものです。

指揮：平井秀明

ゲスト奏者

- 大谷 康子 (ヴァイオリン/東京交響楽団コンサートミストレス) ※19日コンサートミストレス
- 森下 幸路 (ヴァイオリン/大阪シンフォニカー交響楽団首席ソロコンサートマスター) ※18日コンサートマスター
- 桑田 謙 (ヴァイオリン)
- 古川原裕仁 (ヴィオラ)
- 間瀬 利雄 (チェロ)

演奏：高知市第九シンフォニーオーケストラ (高知交響楽団・四国フィルハーモニー管弦楽団他)

合唱：高知市第九シンフォニー合唱団 (一般公募による市民総勢220名)

【プログラム】

平井康三郎作曲 交響詩「土佐風土記」  
ベートーヴェン作曲 交響曲第9番 ニ短調 作品125《合唱付》



ソプラノ 島田美香



アルト 小原伸枝



テノール 馬場崇



バス 小原伸二

高知市文化プラザ大ホール 第1公演 12/18(土) 開場 17:45 開演 18:30 第2公演 12/19(日) 開場 13:15 開演 14:00

前売券 (全席自由)	一般 2,000円 シニア 1,500円 学生 1,000円	当日券	一般 2,500円 シニア 2,000円 学生 1,500円
------------	--------------------------------------	-----	--------------------------------------

※身障者手帳・療育手帳・障害者手帳所持者とその介護者1名は、上記料金より3割引でご購入いただけます。  
※未成年者の入場はご遠慮ください。  
※託児をご希望の方は、生後6ヶ月のお子さまより託児費(無料)をご用意致しますので、事前にお申込みください。  
なお、定員に達し次第締め切らせていただきます。

主催：財団法人高知市文化振興事業団・音楽のある街実行委員会  
共催：高知新聞社・RKC高知放送  
後援：高知市教育委員会  
NHK高知放送局・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・KCB高知ケーブルテレビ・EFエム高知  
協力：高知県合唱連盟・高知交響楽団・四国フィルハーモニー管弦楽団

お問い合わせ (財)高知市文化振興事業団企画事業課 TEL: 088-883-5071

## 日本文化の紹介につながるオペラを

一九九二年二月、音楽への思いが募る学生時代に、日本文化の紹介にもつながるようなオペラの作曲を思い立った。「竹取物語」のクライマックスである、姫が月に帰る宿命を翁と姫に告白する場面を選ぶと、すぐさま詩が浮かんで「別れの Aria」を一晚で書き上げた。「おじいさん、おばあさん、あなたに出会えて幸せでした」で始まる歌詞には、私自身祖父母とともに育ち、アメリカから故郷や家族のことを思い出していた感情とも合い重なるところもあり、ドヴォルザークならぬ「新世界より」といった感覚であったであろうか。翌年夏、ワシントンで黒人のソプラノにより見事な日本語で初演された Aria が、思いがけず地元紙に一面カラーで掲載され、オペラ化へのリックエストも寄せられた。

それから約十年間夢を温めた甲斐があり、昨年二月東京にて世界初演の好機を得たのである。一昨年の秋、指揮活動と並行し徹夜で仕上げにかかっていたころ、合唱団の初稽古が十一月三十日午後から開始されることになり、期待感で胸が膨らんでいた。その当時祖父は肺炎で入院中だったが、容体が安定していたため、合唱団の初稽古に行く前に祖父を見舞い少しオペラの話をした。「おじいちゃん、長年の夢だったオペラ作曲を僕が引き継いで書いています。その初めての練習に午後から行ってきます」と報告すると、とても喜んでくれた。しかし、稽古に出かけるころには容体が急変し、祖父は静かに息を引き取ったのだ。そのため祖父を見送ること、月へと旅立つかぐや姫のイメージが重なり、何とも不思議な気持ちが入り込んできた。その日の真つ赤な雄大な夕日があつたという間に沈む様子は祖父の静かな最期のように決して忘れられない。そして、明け方までオーケストラレ・シオンに追われる毎日を送る中、作曲を一番後回しにしていた序曲の締め切りが翌日となったのは、ちょうど祖父の葬儀の夜。心身ともに疲労が溜まっていた時だったが、祖父の遺影に向かって、明日までに序曲の原稿を書き上げなければならぬ、そして、何か良い知恵かテーマを閃かせてほしいとの旨を祈りの中で語

### 平井秀明氏プロフィール

幼少よりチェロを父平井文一朗に、ピアノと作曲を祖父平井康三郎に師事。桐朋高校卒。米国ロチェスター大政治学科卒。イーストマン、ピーボディ両音楽院で指揮法を学ぶ。92年、ワシントンの若手演奏家からなるキャピタル交響楽団を結成し、音楽監督に就任。95年、チェコのカルロビ・ヴァリ響を指揮し、ヨーロッパデビュー。97年第6回フラデツ・クラール国際指揮者コンクール(チェコ)で第1位となり、直ちにチェコ・ヴィルトゥオーゾ室内管首席指揮者に就任。2000年、ヤナーチェク・フィル定期演奏会に出演。これまでに指揮をD.エフロン、F.ブラウスニツ、O.トゥルフリック、サー・コリン・デイヴィスの各氏に師事。日本国内では、新日本フィル、東フィルをはじめ各地の主要オーケストラに度々客演し好評を博し、02年6月、東京都主催「フレッシュ名曲コンサート～明日のクラシック界のスター達」に出演し、NHK交響楽団をはじめとする都内8つのプロ・オーケストラからなるオール・Tokyo・シンフォニー・オーケストラを指揮、「新時代を担うホープ」と賞賛された。2004年4月、東京ニューシティ管弦楽団の指揮者に就任。オペラ分野でも着実に実績を重ね、「椿姫」(02年)、「蝶々夫人」(03年)、自作「かぐや姫」(作曲・台本)の世界初演(03年)で成功を取めた。03年11月、新国立劇場小劇場にデビュー、「イタリアのモーツァルト」公演にて大成功を収め、05年4月には同劇場大劇場公演、歌劇「フィガロの結婚」を指揮することが決定。04年12月には「オペラ彩」公演、歌劇「ラ・ボエーム」を指揮予定。欧米での活動は03年米国で開催された「Japan Festival」、9月にはロンドン公演のほか、チェコで開催された「ヤング・ブラハ音楽祭」に出演し、ドヴォルザークホールにおいてブラームス交響曲第4番ほかを指揮し絶賛を博した。「クラシックをより身近に」をモットーとした独自企画「トーク&リスニング・ガイド」(99年～)を主宰するなど活動は多岐に渡り、今後の活躍が大いに期待される新時代の指揮者である。

りかけた。そして気が付いてみると筆が走り出し、明け方には完成。祖父も生前作曲する際の「閃き」は、どこから来るのかわからない、と言っていたが、まさにその思いそのものだった。

この「閃き」も一期一会の如く貴重

重なる一瞬であるように、今回の「第九」も皆様との出会いを大切に、雄大かつ心温まるメロディーとハーモニーを土佐の地に響かせることができれば、と願っている。(ひらひひであき/指揮者・作曲家)



鼓の特訓を受ける子どもたち

毎週日曜日の夜になると、赤岡吉川地区商工会の二階からは、三味線と鼓の音色が聞こえてきます。

今年七月に開催された絵金祭りの絵金歌舞伎では、子どもたちを役者とした「こども歌舞伎」が上演されました。この豆役者たちが演じたのは、絵金の芝居絵大風の中にある、義経千本桜より「鮎屋の段」。小学五年生を中心とした十人の豆役者たちは、その大人顔負けの演技に観客から拍手喝采を浴びました。この舞台稽古は昨年の十一月から始まり、立ち居振る舞いから発声まで、芝居

の基礎から学んで、本番までの稽古の積み重ねで大きな舞台を乗り越えることができました。

そのとき、子どもたちは、舞台上で生演奏されていた三味線や鼓に大変興味を持ったようでした。そして絵金祭りの後、大人たちに交じって竹本美園さんの指導を受け始め、十一月に開かれる町の文化祭に向けて、現在猛特訓中なのです。

絵金歌舞伎の歴史は、まだ新しいものです。そもそも絵金歌舞伎誕生のきっかけは、赤岡町に所蔵されている、幕末の絵師・弘瀬金蔵、通称「絵金」の描いた二十数点の芝居絵大風。これに描かれている芝居を、自分たちで実際に演じて、毎年七月に開催されている絵金祭りをもっと盛り上げ、来てくれた人たちに楽しんでもらおうということから始まりました。

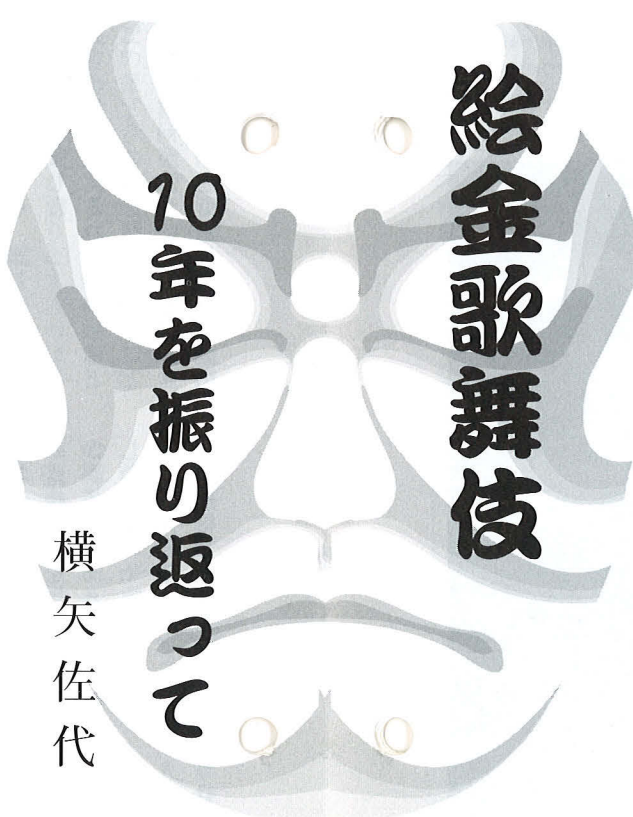
素人歌舞伎を始めるとなれば、ゼロからの出発です。演技指導、衣装、かつら、メイク、大道具…すべて準備しなくてはなりません。町や商工

会に話を持ちかけてみたものの、そのような予算は出せないと断られてしまいました。翌年、再び計画を持つていきましたが、話はまとまらず、半ばあきらめていたところ、高知市の土佐の地芝居を復活させる「土佐歌舞伎」初公演のニュースが耳に入りました。このことが大きな刺激となり、行政や商工会の動くのを待っていたらいつになるか分からない、それなら自分たちでやれるところまでやってみようと、平成五年、今年八十四歳になる一人の女性が声をかけ、町の有志三十二人で「土佐絵金歌舞伎伝承会」は発足しました。

初公演の費用は、地元商店街の広告をパンフレットに載せることで賄いました。なるべく費用をかけないようにと、衣装、小道具、大道具はすべて自分たちの手作り。舞台も、カラオケ会場となる屋外特設舞台を、カラオケ大会が始まるまで借りることになりました。現在は、JAさんの協力で集荷場内に特設舞台を組んでおり、雨の心配がなくなりました

発想に基づいた個性豊かな地域づくりの取り組みが評価されて「地域づくり自治大臣表彰」に選ばれるなど、失敗や成功の繰り返しでしたが、次の年への大きなステップとなりました。

平成十四年夏、絵金祭りでの公演が、十回目を迎えることになりました。記念公演の演目は、この十年、何も分からない私たちをここまで育ててくださった中村和子師指導による「浄瑠璃式三番叟」、日本舞踊を指導してくださった坂東はつ子師指導による「お祭り」、そして、役者はもちろん裏方スタッフも自分たちの仕事に自信を持つことのできた思い出深い、花柳貴答師指導による「葛の葉・子別れの段」でした。この舞台では、絵金歌舞伎が始まったときには独身であった二人の役者の親子共演が実現し、十年の歳月を改めて感じたことでした。



10年を振り返って

絵金歌舞伎

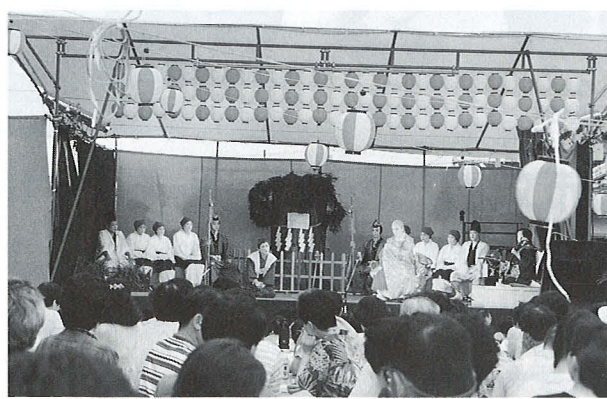
横矢佐代

の少ない私たちにとって、本物の芝居を教えてもらう素晴らしい経験となりました。

このように、まだまだ未熟な絵金歌舞伎ではありますが、平成十一年にはフランスで開催されたジャパンウィークに参加しました。絵金歌舞伎を通して世界に「絵金の町・赤岡町」をPRしようという、会員の熱い思いから実現したのです。義経千本桜では、「まんじゅうはどうじゃ?」を「マドレーヌはどうじゃ?」に変えるなど、フランス語でサービ

ス。芸術の国フランスでの公演は不安でもありましたが、由緒あるモリエール劇場に響き渡った拍手の音は、今なお私たちの心に残っています。また、町に保存されている絵金芝居絵大風風に描かれた芝居の場面を、町民自ら演じてみようとの発想がユニークであり、その実現のために町を挙げて努力し、新たなコミュニケーション創造と活性化に貢献していることが評価されて「サントリー地域文化賞」をいただき、住民の主體的な

第一回公演の様子。野外特設舞台で行った「二月堂良弁杉の由来」



が、素人歌舞伎構想から三年目に迎えた初公演では、梅雨明け間近の集中豪雨を浴びました。屋根のテントやステージの上にはたまった雨水を気にしながらの公演となりましたが、観客から拍手喝采をいただき、一同自信を持つことができました。

第二回公演からは、自分たちもやればできるという自信を持ち、演目も一つから三つに増やしました。高知市在住で、少女歌舞伎の経験者である中村和子さんを頼りに、情熱とパワーで五年間があつという間に過

して毎年公演できるようにと支援してくださっている地元商店街の方たち。一つの点を囲む二重三重の輪がこの町・赤岡町の新しい地域文化として広がっています。この町に絵金の描いた芝居絵大風風がある限り、赤岡町の地域文化として絵金歌舞伎をしっかりと根付かせていきたいと思えます。そして、「絵金を核としたまちづくり」のお手伝いとして、頑張っていきたいです。次の十年後の夢、芝居小屋建設に向かって。(よこやさよ／土佐絵金歌舞伎伝承会事務局)



こども歌舞伎、義経千本桜「鮎屋の段」



第10回公演。親子競演の練習風景。

# 本を手渡す

—高知こどもの図書館の5年—

浜垣昌子



四十年ばかり前、子育てを始めたころ、たくさんの素晴らしい絵本や子どもの本に出会いました。子どもと自分だけ、せいぜい父親を巻き込むくらいでひっそりとはありましたが、子どもが大きくなっても息長くみんで読みつづけました。もしかすると家族を結んでいた絆は共有する物語の世界だったのかもしれない。

私は長い間気づきませんでしたでしたが、同じころ、高知のあちらこちらの家庭で、地域の文庫で、また「こども劇場」で、こんなふうな「子どもの本」への思いがそれぞれ静かに育まれていたのです。そして長い時間をかけて熟成されてきたその思いは各地で芽をふき、やがて花開き、そこに実ったのが「高知こどもの図書館」だと思います。

種が芽を出すにも高知の土壌は豊

かでしたし、花を咲かせるのに必要なお日さまも、人の愛もたっぷりありました。私は県立図書館の読書会で子どもの本を楽しんでいるうちにいつのまにか大勢の輪の中にいて、そこで学んだのは本を読むという行為も決して独りや家族だけのものではなく社会性を持つものでなければならぬということでした。

幼い子が初めて本と出会うのは必ず人の手を介してであり、子どもに本を手渡していくために大人が積極的に関わっていくことが必要である、本から獲得する言葉、物語の中で培う想像力が、人が育つ時にどんなに大切かということも、語り合ううちに分かかってきました。

読書環境を整えるための第一歩として、子どもの本を核とした「こどもの図書館」がほしい、そしてそこから出発して子どもと本の出会いの

場をたくさんつくりたいと、県立図書館の移転問題を契機に設立への第一歩を踏み出しました。約十年前のことです。

賛同者は大きく拡がりましたが、一方で行政への働きかけはなかなか進まず、どのような運営形態の図書館にすればいいのかということさえ目処がつかずまま。

ただ、文庫を続けてこられた方の蔵書を中心に約二万冊の子どもの本が用意できるということは非常に大きな力となり、賛同者とともに学習をしながら粘り強く運動を続けていきました。今ではすっかり当たり前前の言葉になった「官民協働」ということが一部の地域でやっと言われるようになったところです。

一九九八年、県庁内に「こども課」が誕生したことで事態は急展開し、「こどもの図書館をつくる会」は「こども課」を交渉の窓口とすることなり、そこで同年十二月に施行されたNPO法による図書館の設立が可能になりました。施設の貸与、建物の改修という決定は、子どもへの直接支援を掲げた行政の姿勢がうかがえてほんとうにうれしいことでした。

一九九九年三月、NPO法人申請、七月取得。それからわずか五カ月後

企画展など、いつも楽しい展示がなされています。

読書離れが言われる、中・高校生の利用を増やしたいというのも開館以来の目標のひとつですが、今年、読書会がきっかけとなり彼等を巻き込んでのブックガイド「よんどく!?」当世若者読書案内」まで出版できたのは特筆すべき五年目ならこそ成果でした。

また、NPO法人は報告と公開が義務づけられています。そのような資料づくりの真面目さ、会員への広報誌の出来栄、一見地味なこういう作業をしつかりと見てほしいと思います。

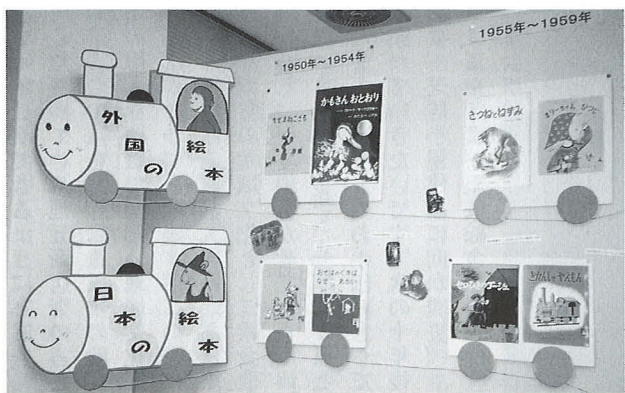
人件費も資料費もすべてを会費と寄付、助成金などでまかなうNPOは、もちろん非常に不安な財政状況ではありますが、事実、五年間で心配の消えた日は一日もありません。この活動が必要とされるように一日一日を重ねていけば必ず支えてくれる人がいると信じています。

開館してすぐに「子ども読書年」が設定されたり「子どもの読書活動推進法」が施行されたり、各県で幼い子へのブックサービスが始まるなど、子どもと読書をめぐっては国レベルでの動きが活発で、こどもの図書館への期待も当然大きくなりまし

の九九年十二月十二日、「NPO（特定非営利活動）法人高知こどもの図書館」が開館しました。

この間の準備は大変なものでしたが、それらもう次第に過去のものとなり、今も深く記憶に残っているのは人々のやさしさとあたたかさです。さまざまな立場の方が、それぞれの場で誠実に対応してくださいました。私はそれを生涯の財産にしました。

さて、高知こどもの図書館は十二月に開館五周年を迎えます。ご支援



た。

五周年の今年は、記念の年にふさわしく豊かな活動をしたいと数々の計画をしました。

春には児童文学の名作「飛ぶ教室」の映画上映会を、夏には県立文学館の「マザーグース展」にちなんで古典絵本の研究者でもある島多代さんの講演会を、九月には絵本作家あべ弘士さんと子どもたちが一緒に壁画を描くというユニークな催しを、開催しました。

そして記念の月、十二月には「ゲド戦記」の訳をはじめ素晴らしい作品を日本で紹介されている清水真砂子さんをお招きします。教育者として若者に注ぐまなざしのやさしさとは逆に、翻訳に対しては、時に命を削って言葉を紡いでいるのではないかと思います。皆さまもぜひ、ご参加ください（十二月四日土曜日午後二時から、県立文学館で）。

五年はまだ歩み始めてほんの小さな節目です。十年後も、二十年後も子どもたちの心やすらぐ場であり、心をこめて本を手渡していく人たちがいますように、また、そんな場所が増えているようにと願っています。はまがきまさこ/NPO法人高知こどもの図書館理事長



いただいた皆様にあらためて心から御礼を申し上げます。おひとりおひとりの応援が五年間の継続の力になりました。ほんとうにありがとうございます。

日本で初めてのNPO図書館であるということから活動内容よりもむ

しろその運営形態が注目されて全国から行政や研究者などの視察が相次いだのは、今の社会情勢を反映していることでもあったでしょう。しかし、こどもの図書館が誇りとするのは日常の活動です。

豊かな蔵書、運営にあたる人たち職員、理事、ボランティア——、そして開館以来続けている恒例の事業です。

開館の時に柱となった本も長年の経験から選ばれたものばかりですが、新しく購入する本や開架する本は、すべて毎月の選書委員会で選び、さらに職員全員が目を通して決定します。そのようにして選ばれた本から延べ十六万数千冊の本がここで子どもたちに手渡されました。来館者は約九万人。図書館の中の活動ばかりでなく、図書館から遠い各地の学校や幼稚園へ本やおはなしを届けに出かけることも月に何度もありますから、ずいぶん大勢の子どもたちが本を待っていてくれるわけです。

定期的に図書館で行われる行事は、絵本研究会、折り紙教室、おはなし会、中学生や高校生も参加しての読書会、また開館時にいただいたピアノを使っている。本とともだちコンサート」などがあり、多目的スペースでは、独自の企画や他団体と共催の

私が勤務する中岡慎太郎館は、中岡慎太郎の生涯と業績の紹介と顕彰活動を行うことを目的として開館した、安芸郡北川村設立・運営の歴史資料館です。

今年で開館十周年を迎えた当館で

## 幕末の人物たちの身長

豊田満広

点ほどです。展示資料のなかには慎太郎や三条実美が実際に着ていた衣類もあり、それをご覧になった来館者の方々から「幕末の人って思っていたより身長が低いんですね」という声が続きました。確かに現代人の身長や時代劇に登場する役者さんの身長と比べて、また龍馬や西郷がものすごい大男だったという当時の人の証言等から考えて、そのようなギャップを感じたかもしれません。では、実際の幕末の人物の身長はどうだったのでしょうか？

そのことについて「中岡慎太郎と薩長連合」展用の資料調査から分かったことを例にして紹介します。

歴史上の人物の身長を知る方法の一つに、彼らが着ていた衣類の寸法が挙げられます。

まず、中岡慎太郎の身長は一五三センチでした。それは当館が所蔵している慎太郎着用用の袴(当時の礼服)から分かりました。袴の寸法は、上半身の肩幅が七〇センチ、身丈(上着の寸法)が六三センチ、下半身の袴の丈が、背板を含めて一〇一センチあります。

次に、三条実美の身長は一五六センチでした。それは彼がはいっていた差袴(今でいうジャージーやジパン感覚ではく袴。現在は、神主さんが

儀式の時などにはいっています)という公家の普段着から分かりました。お公家さんの衣裳はゆったりと着るため実際の体格より大きく作られるのですが、差袴は身長に合わせて作られます。採寸の方法は、帯のすぐ下から裾までの長さを測ります。これは人間の腰骨からくるぶしまでの長さになります。三条の差袴は七七センチでした(ちなみに一七〇センチの人だと九〇センチ、一六五センチの人だと八五センチです)。

それでは、その他の人物はどうでしょう？

坂本龍馬は一七二センチ(体重は約八〇キロ)です。これは京都国立博物館にある紋付から分かります。次に、西郷隆盛は一七八センチ(体重は一〇八キロ。鹿児島県歴史資料センター黎明館に彼の軍服が保存されています)。高杉晋作は一五六センチ、勝海舟と徳川慶喜はなんと一五〇センチだったそうです。

この数値を見ると、龍馬や西郷が大柄で、慎太郎や勝海舟が非常に小柄な人という印象を持たれたと思います。ですが、幕末の成人男子の平均身長が一体いくらだったかご存じでしょうか？

実は、なんと一五六センチ前後です。そう考えると慎太郎や三条の身

創り上げる喜びを共有しました。

### ◇ヴォイス・トレーニングに挑戦！

九月十八日には、小ホールで中高生ヴォーカル・ワークシヨップを開催し、二十六名が参加。本県出身で、東京でヴォーカルスクールを主宰し、ブルースシンガーとしても活躍中の西村入道さん・八重子さんの指導で、声の出る身体の仕組み、発声練習、リズムのとり方、身体のリラックス

法などを学びました。普段あまりなじみのない分野ですが、バンド活動などをする若者が多い中、こうしたワークシヨップを定期的に開いてほしいという声が多く聞かれました。

### ◆優雅でコミカルなオペラを堪能 「コシ・ファン・トゥッテ」

九月二十九日、大ホールで、オーストリアのバーデン市立劇場によるオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」を開催しました。

このオペラは、「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」などと並んでモーツァルトの代表作と言われるもので、イタリアのナポリを舞台に、二組の若いカップルの恋の騒動をユーモラスに描いた作品です。

管弦楽がモーツァルトの流麗な音楽をうたい上げる中、男女六人の主役たちは美しいアンサンブルを聴かせるとともに、明るくコミカルな芝居を熱演。観客から何度も笑いが起こっていました。

台風21号直撃という悪天候のため、残念ながら参加できなかったという方も少なくありませんでしたが、約五百六十人の観客は本場のオペラを堪能しました。

## 高知市文化プラザ かるぽーと 8月～9月の事業のご報告

### ◆出会い、体験、感動！

#### 高知市文化体験プログラム

子どもたちが、さまざまな文化にふれ、体験できる「高知市文化体験プログラム」。八月～九月には「文楽・落語を体験しよう！」「創ってみよう！ ミュージカル」「ヴォイス・トレーニングに挑戦！」の三事業を実施し、参加した小・中・高校生はもちろんのこと、保護者や一般の観客にも大きな感動を与えました。

#### ◇文楽・落語を体験しよう！

普段、触れることの少ない古典芸能「文楽」。今回は、土佐清水市出身の人形遣い吉田玉翔さんが、高知の子どもたちに文楽のことを少しでも知ってもらおうと、八月十七日、十八日の二日間、若手継承者の仲間たちと一緒に、小ホールで「文楽・落語を体験しよう！」を行いました。人形遣い・太夫・三味線の役割の解説の後、子どもたちが実際に高座

に上がって太夫体験をしたり人形を扱ってみたりした後、落語と文楽「伊達娘恋緋鹿子」火の見櫓の段」を鑑賞。会場は、笑いや感動のため息に包まれ、約百五十人の参加者は古典芸能の魅力にみせられました。

◇創ってみよう！ ミュージカル  
八月二十六・二十七・二十九日に行った「創ってみよう！ ミュージカル」は、二日間の演技・歌・ダンスのレッスンの後、大ホールでミュージカル「宇宙旅行2」かぐや姫の忘れもの」を上演するというもの。小学三年～中学三年生の参加者七十六人は三日間一人の欠席者もなく練習・本番に臨み、「毎日楽しくって仕方なかった」「また来年もやりたい」という感想を寄せています。

二十九日の公演には、保護者をはじめ、お友達や一般の方々約四百人が来場。誘導灯を使って宇宙船着陸を手助けしたり、大声でパイロットを応援したりと、観客も出演者と一緒にミュージカルに参加し、ともに



▶「自分の声の幅が広がった」「練習前後の声の違いを実感できた」などの感想が寄せられました

散歩の途中で



とある住宅の庭先に、懐かしい手動ポンプを見つけた。まだ現役ですか？と尋ねると、残念ながら飾り物で、ぶどうのつるをはわせているとのこと。遊び心のあるご主人が古道具好きで、いろんなものをもらってくるんだとか。以前はポンプへ「馬の手綱はここへつないでください」という札まで下げていたそう。

風俗

スポーツいささか論

若いころ、同僚と卓球台を囲んだことがある。その中で、並み居る連中を寄せ付けぬ技量の持ち主がいた。聞けば学生するとき、国体選手だったとか。普通人？との違いに瞠目した記憶がある。訓練の成果というものは、スポーツには限らないが、文句なしに認めざるを得ないものがある。

国体選手がオリンピック選手になり、メダルの獲得者ということになれば、素人には想像のつかないレベルの人であり、その次元について云々する神経には、首を傾げたくなる部分もあるだろうが、あえて言う。金メダル万歳！がいささか度

を越していたのではないかと。確か参加することに意義があったはずのオリンピックが、国威高揚の場になり、スポーツに国境はないはずの理念を失わせた。記録に拘泥し、勝ち負けにこだわりすぎているのではないか。嗚呼踊りのメダル不要論も、そこから派生する。所詮走ることには馬にはかなわないし、泳ぐことは河童に太刀打ちできないのだ。人間の人間としての尊厳は、などと言いたくなる。マスコミがそのパワーの大部分を注ぎ込んで報道したアテネニュースや日々のスポーツ欄の陰に、戦火は取まらず、悪徳商法は横行し、為政者は自己保身に走り、人心と山野は荒れるのみ、という日が重ねられているのではなからうか？

(3)



Original goods  
Artist goods  
Ticket

かるぼーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動が続いている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田 2-1  
高知市文化プラザかるぼーと 3階  
Tel 088-883-5052  
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）  
営業時間 10:00~18:00

今号の表紙

「春、ここに僕はいる」 小野寺るか  
静かにその場所にそのひとはいる。ただその場所にあなたがいることの大切さを表現したい、と思ひながら粘土に向かっていた。派手さはなくても時を越えて作品に向かう人の心に静かに訴えかけるものを作り続けていきたい。  
(おのでらるか)

高知を撮る

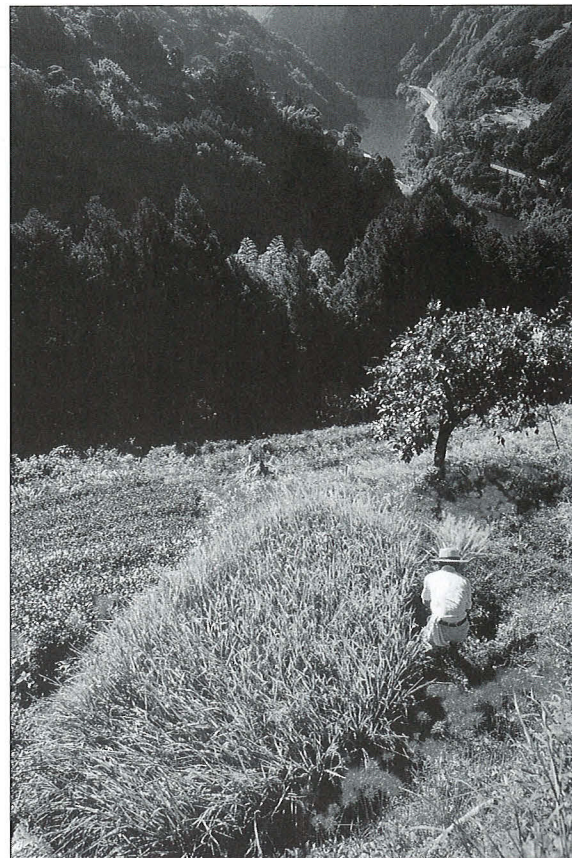
第20回写真コンテスト入賞作品

実りの秋

(平成15年 吾川村)

杉野節子

仁淀川沿いの小さな田の稲刈りの様子です。



「官官接待」の衰退で、いい加減さびれた夜の街に、「若者の酒離れ」という、新木の枯らしが吹き始めている。

最近では、上司が「今夜一杯やらんかね？」と誘っても、「失礼」する若者が多いようである。失礼して、若者同士でたむろして、上司の品定めでもするのならばまだしも、「一人の世界」に逃げ込むべく帰路を急ぐのだと聞くと、秋風が一層身に沁みる。社員だけではない。最近では、大学の現地実習などで、「打ち上げ」に「コンパをやらぬ例が珍しくないという。コンパだけを楽しみ実習に励んだ世代には理解できない心根である。

若者の酒離れ



風俗歳時記

してきた功績は計り知れない。人生であれ、政治であれ、経済であれ、酒に媒介されて、論議が深められてきた。学会などでも、研究発表時の討論よりも、夜の懇親会で、より突っ込んだ話に花が咲くのは常識である。

シンポジウムという言葉自体が古代ギリシャの「共に飲むこと（饗宴）」に由来しているのはよく知られている。アテネオリンピックで示されたギリシャ文化の奥深さも酒と無関係ではあるまい。

この「憂うべき現象」の原因は酒に在るのではない。文化の継承システムにほころびが生じているのである。

かつての若者は、さまざま「群れ」の中で、酒のこともセックスのことも、好奇心と自らの工夫で取り込んできた。「群れ」は自発的な学びの場であった。「群れ」に無縁で、受け身の教育しか知らない若者たちは、「遊び方」さえ、誰かが「教えて」くれるものだと思ひ込んでいる。

秋風が吹いているのは「夜の街」だけではない。路



# TRINITY

IRISH DANCE COMPANY

アイリッシュ・ダンス・カンパニー《トリニティ》



2004 **11/16** (火) 18:30開場 19:00開演 **高知市文化プラザ大ホール**

S席=6,500円 A席=5,500円 第2バルコニー席=4,500円 第3バルコニー席=3,000円 第4バルコニー席=2,000円

11月のかるぽーとに、アイルランドの風が吹く…



**IRISH ACCORDION**

# JACKIE DALY

アイリッシュ・アコーディオンの真髄 ジャッキー・デイリー

2004 **11/23** (火) **24** (水) 18:30開場 19:00開演

**高知市文化プラザ小ホール**

全席自由 前売り2,800円(当日3,000円)・2日通し券5,000円

高知市文化プラザ  
**かるぽーと**  
〒780-8529 高知市九反田2-1

お問い合わせ:088-883-5071  
電話予約:088-883-5073  
<http://www.bunkaplaza.or.jp>

文化高知 No.122 「隔月発行」  
2004年(平成16年)11月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780-8529 高知市九反田2番1号  
TEL(088)883-5011(代表)郵便振替01800-5114809